

用ゐて明確なる知見、圓滿なる感情、堅固なる意思を有して將來の國家を組織する兒童の爲めに確信あり、熱誠なる所の教育を施さんことは、吾人の實に切望に堪へざるところである。

寄書



愉快なる家庭

東京 秋影 生

家庭の愉快は何邊より來るかと題して、神門女史の擧げられたる三要素も然るとながら余は更に(一)家族の趣味好尚の一致(二)餘裕ある生活の二要素を認めむと欲す。(三)今夫れ良人は園藝を好みて音樂の趣味を解せず、妻は音樂を喜びて園藝

に興趣を牽かず、彼の樂しむ所は此の苦しむ所に此の喜ぶ所は彼の厭ふ所畢竟趣味好尚の一致を缺く時は感情の裕和をみると能はず、往々にして衝突を來すに至る、それ感情の衝突ほど不愉快を醸すものはなく家庭の平和屢之がために破る。而してこれもと些々たる趣味の相異よりして來ると多き也。若し一人の樂しむ所は即ち一家の樂しむ所、舉族怡和して藹々たるを得ば、家庭は長しへに愉快ならむ。(二)かの山に登るもの、峻峻を攀ぢ、荆棘を開き、喘々焉として疲倦困倒せむとす、偶々夷に就て憩ひ、眺瞰を試むれば、眼界遠く開けて田疇居落相連る所、炊煙縷の如く揚り、一川俗々銀蛇を其間に走らし、時に白帆點々上下するを見る、是に於て心神頓に濶然、脚力新に加はり疲倦を忘れて頂を極むるを得べし。生活に餘裕を

要する、亦なほ此の如きか、蓋し人、業に専られば従て其業に興味を生ずるに至ると雖も、一年三百六十餘日、朝々暮々同一の日課をくりかへして、又他を顧るとなくんば、能く疲倦を來すとなからむや、此間一日の業を廢して遊戯に充て以て氣力の恢復を圖らば、疲倦を醫して愉快に再び業に勵むを得む、殊に多數の男女を雇使する家に於ては最もその必要をみる、遊戯は擧族共に樂しむを得るものなるべく、春は東風吹く野への蕨探り、秋は紅葉濃き山路の茸狩など、興趣と健康とを併せ得て、一家の和樂に資すると大ならずむばわらず。かの西洋の人は、安息日の至るや擧家行厨をたづさへて山隈水涯に遊び愉快に一日を暮らすを常とすといふ、わが邦人の生活に餘裕なきは誠に恨事にわらずや。その家庭の無趣味にして快

潤を缺くも畢竟之れがためのみ。

以上神門女史の説をよみて感ずる所を記す、説いて盡さざるところあり、他日を期せむ。

余が實驗せる特殊なる家庭と

その兒童

岩手縣師 菅原 文一郎
範學校

私はかく大氣さにいるのは、實は本意ではありませぬが、只私が地方にありて、一寸餓鬼大將をやつたときに、或る一人の生徒について、大に感ずる所があつたので、之れは自分ながら、小供を育てる上について、大に氣をつけなければならぬ所だと思ひましたで、遂筆の拙いのも顧みず、感じたを述べようとする次第でございます。